

海外の話題

リーマンショックから一年、消費者動向の変化について

農林中央金庫 ロンドン支店長 高 島 浩

早いもので、いわゆるリーマンショックから 1 年、サブプライム危機からは 2 年が経過しようとしている。英国においても、2 年前の Northern Rock の破綻から始まり、昨年 10 月には英国大手のロイズ銀行、RBS 銀行の政府による実質国有化等大きな金融環境の変化が見られた。

幸い、この半年間は、世界の中央銀行による協調した非伝統的な金融政策により、金融機関の流動性危機は一旦収まりつつあり、一部ラトビア等東欧諸国の経済危機の問題はくすぶるものの、金融市場に大きなインパクトを与える事象は発生していない。

英国においても、主な経済指標が景気後退の最悪期を脱したとみなせるような発表が相次ぎ、遅ればせながら英国もリセッションから脱却したとの見方がアナリストのレポートにも見られるようになってきた。

こうした中、消費者の行動にも少なからず影響が出ているようである。以前は、夏休みに太陽を求めてスペイン等の南ヨーロッパに旅行(Vacation)に行っていた人たちが国内回帰し、ブライトンなどの英国の南部にある海辺での海水浴やキャンピングカーを借り切って観光地でキャンプするなどのスタイルに変わってきている。この現象を国内滞在型なので Staycation (滞在の Stay と Vacation を組み合わせた造語) と言うそうである。テレビでの報道を見れば、週末の海辺のリゾートはかつての湘南を彷彿させるほどの混雑度合いであるし、少し郊外をドライブすると、白いキャンピングカーや自転車等を積んだ車の多さにびっくりするほどである。この恩恵を受けてか、一部のスーパーでバーベキュー用品の売り上げは 30% 増加し、また、いかにも英国らしいのだが、車での移動時に飼い犬を固定するための犬用のシートベルトの類は売り上げが急増しているとのことである。犬にとってみれば、昨年までは Vacation となれば家族と離れ離れとなったものが、今年からは家族とともに Staycation を楽しめるとあって、この不況もまんざらでもないものであろう。

また、週末はパブでランチを楽しんでいた人たちは、スーパーでビールを買い、インターネットでデリバリーの食事を注文するように変化してきており、この景気後退で大きく影響を受けると見られていた小売業等がこの夏比較的好調であったそうである。アナリストの判断は、低金利による金利負担減少で余裕資金ができたことや一時的に引き下げられた消費税の影響であるとしているが、こうした英国国民の生活スタイルの変化も影響しているのではないだろうか。

一方、海外の富裕層にとってみれば、昨今のポンド安によりかつてないほど英国が魅力的な訪問先となっている。中東やロシアからの買い物客に加えて、中国からも買い物客が増加している。ロンドンの高級百貨店のハロッズでは売り上げが前年比 9% 増加し、過去最高の実績となった。英国人の財布の紐はきつくなりつつあるが、それを海外の富裕層が補って余りあるといったところであろう。

しかし、小売業はこうした国民の消費者行動の変化や外国旅行者による売り上げ増により今後とも恩恵を受けると考えていないようである。英国の失業者は 3 百万人となるとの予想もあり、多くの英国国民は消費するよりは借金の返済を優先する傾向が出てきている。本年 7 月には 1993 年以降はじめて、英国国民の個人借入伸び率がマイナスに転じる、すなわち、返済超となった。加えて、来年 1 月からは消費税も 17.5% と元の水準に戻ることにとなる。小売業界では、在庫の削減やストリートを挙げたプロモーションなどの対策を講じている。一部では、8 月からクリスマスカードの販売を始めているとのこと、今年のクリスマス商戦は相当早まるのではないだろうか。